

「令和 6 (2024) 年度とちぎっ子学習状況調査」結果分析

令和 6 年 8 月
下野市教育委員会

調査について

1 調査の概要（「とちぎっ子学習状況調査」実施要項より一部抜粋）

（1）調査の目的

本調査の実施により本県児童生徒の学力や学習の状況等を把握・分析し、児童生徒一人一人の課題を明確にするとともに、各学校が組織的に学習指導における検証改善サイクルの構築・運用に取り組むことにより、本県児童生徒の学力向上に資する。

（2）調査実施日

令和 6 (2024) 年 4 月 18 日（木）

（3）調査対象

小学校調査：小・義務教育学校第 4・5 学年

中学校調査：中学校第 2 学年、義務教育学校第 8 学年

（4）調査事項及び手法

① 教科に関する調査

- ・小学校調査：国語、算数、理科
- ・中学校調査：国語、社会、数学、理科、英語

② 児童生徒質問紙調査

- ・内 容：学習意欲、学習方法、学習環境、家庭学習等
- ・方 法：ICT 端末を用いたオンライン方式
- ・質問数：小学校 94 問、中学校 113 問

③ 学校に対する調査

学校における指導に関する取組や学習環境等

（5）その他

本調査の結果は、学力の特定の一部であること、学校における活動の一側面であることに留意し、児童生徒の全般的な学習状況への指導・改善等につなげるよう留意する。

2 本市の参加状況 ※参加人数は最も多かった教科のもの

調査対象内訳	参加校数	参加人数
小・義務教育学校第 4 学年	9 校	4 8 9 人
小・義務教育学校第 5 学年	9 校	4 7 4 人
中学校第 2 学年・義務教育学校第 8 学年	4 校	4 8 3 人

本市の結果について

※小学校には義務教育学校前期課程、中学校には義務教育学校後期課程を含みます。

【教科に関する調査の結果】※下野市と栃木県の平均正答率の比較

- ◎ 大きく上回っている（５ポイント以上）
- 上回っている（１ポイント以上 ５ポイント未満）
- － 同程度（±１ポイント未満）
- ▽ 下回っている（１ポイント以上 ５ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（５ポイント以上）

《小学校》

第 4 学 年			第 5 学 年		
内 容		県との比較	内 容		県との比較
国 語	全 体	○	国 語	全 体	○
算 数	全 体	○	算 数	全 体	◎
理 科	全 体	○	理 科	全 体	○

《中学校》

第 2 学 年					
内 容		県との比較	内 容		県との比較
国 語	全 体	○	社 会	全 体	○
数 学	全 体	○	理 科	全 体	○
英 語	全 体	○			

各教科の結果について

1 国語

(1) 小学校第4学年

- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）



① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能			思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や使い方に関する事項	情報の扱い方に関する事項	我が国の言語文化に関する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	○	—	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	◎

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。
- ・「書くこと」の領域における記述問題（段落の役割を理解し、指定された条件に合わせて文章を記述する設問）では、県平均正答率を10ポイント以上上回った。授業において、指定された文字数や段落数を基に文章を組み立てる活動を取り入れてきたことも定着の要因と考えられる。今後は、自分の考えが明確に伝わっているか、考えを支える理由や事例が分かりやすく示されているかといった視点にも目を向け、自己評価や相互評価の場を設け、中間評価を基に再考する活動を取り入れるなどの指導方法の工夫により、より一層の表現力の向上が期待される。
- ・「言葉の特徴や使い方に関する事項」において、文中の主語と述語の関係を問う設問に課題が見られた。他の教科や日常生活において文章を書く活動の中で、主語を省略せずに文章を書いたり、主述の関係が適切であるか確認したりする場を意識的に設け、定着を図ることが求められる。

(2) 小学校第5学年

◎	大きく上回っている（5ポイント以上）
○	上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
—	同程度（±1ポイント未満）
▽	下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
▼	大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や使い方に関する事項	我が国の言語文化に関する事項	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	◎	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	◎

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・「読むこと」の領域においては、叙述を基に段落相互の関係を捉えることができるかを問う設問に課題が見られた。解答類型を見ると、4割強の児童が転換の接続詞から始まる段落とその前の段落を同じまとまりとして捉えており、同じ誤答における県の出現率を1割以上上回った。段落相互の関係を捉えるに当たっては、接続詞や重要な語句に着目しながら読むことが必要である。接続詞が前後の文章とどのような関係にあるのか整理したり、接続詞がある場合とない場合を比較しながら接続詞の効果を考えたりするなど、発問や活動の工夫が求められる。
- ・「書くこと」の領域における記述式の設問においては、県平均正答率を10ポイント以上上回る良好な結果となった。昨年度も良好な結果であり、2段落構成で事実と自分の考えを明確にして記述する力は、全体的に定着していると考えられる。今後、単元構成を工夫することにより、「読むこと」の領域での学習と「書くこと」の領域の学習を往還する学習過程の中で段落相互の関係を捉える力の育成を図りたい。

(3) 中学校第2学年

- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	知識及び技能		思考力、判断力、表現力等		
	言葉の特徴や使い 方に関する事項	我が国の言語文化 に関する事項	話すこと・ 聞くこと	書くこと	読むこと
県との比較	○	▽	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

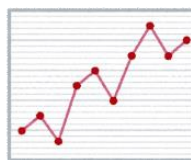
	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	—	◎

⑤ 考察

- ・「我が国の言語文化に関する事項」の領域を除き、教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率と同程度か上回る結果となった。
- ・「書くこと」の領域における記述問題では、県平均正答率を10ポイント以上上回った。小学生時の調査から「書くこと」の領域における結果は継続して良好であり、読み取った内容を基に自分の考えを明確にして文章を記述する力は、全体的に定着していると考えられる。市内学校の多くが学力向上改善プランにおいて、国語以外の教科においても書く活動を位置付けており、功を奏していると考えられる。今後は、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」の領域との関連を図るなど単元構成の工夫から、総合的な資質・能力の育成を目指したい。
- ・昨年同様、「我が国の言語文化に関する事項」における歴史的仮名遣いに関する設問に課題が見られた。指導に当たっては、仮名遣いを暗記することに重点を置くのではなく、生徒が古文のリズムや響きに慣れ親しみながら歴史的仮名遣いについて理解できるよう、音読活動を適宜取り入れながら学習を進めるなどの工夫が考えられる。

2 算数・数学

(1) 小学校第4学年



- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と計算	図形	測定	データの活用
県との比較	○	○	◎	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・「測定」の領域における短答式の問題では、県平均正答率を大きく上回った。時間と時刻を理解し、時間を求める力が身に付いてきていると考えられる。
- ・「数と計算」の領域における分数の理解の問題においては、正答率は低いものの県平均正答率を下回った。数量の関係を示した図を用いながら分数の量的な感覚をもたせ、さらにその量を言葉で説明させるなど言語化することにより、深い理解につなげることが大切である。
- ・「データの活用」の領域における記述式の問題では、県平均正答率を上回ったが、正答率は低く無解答率が高い結果となった。目的によってグラフの表し方を変えることで、分かりやすくなることを体験させるなど、実感を伴った理解ができるように指導することが大切である。

(2) 小学校第5学年

- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	◎

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と計算	図形	変化と関係	データの活用
県との比較	◎	○	◎	◎

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	◎	◎

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	◎	◎

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を大きく上回った。
- ・「数と計算」の領域における知識・技能の問題では、県平均正答率を大きく上回った。二つの数量の比べ方や表し方について理解し、目的に応じて大きさを比べたり表現したりする方法が身に付いていると考えられる。
- ・「図形」の領域において思考する問題では、県平均正答率を下回った。「図形」の学習においては、図形を構成する要素に着目し、模型等に触れながら図形の要素同士の関係を見たり考えたりするなど、体験的な学習を多く取り入れることにより、実感を伴った理解や思考につなげることが大切である。
- ・「データの活用」の領域における記述式の問題では、県平均正答率を上回ったが、正答率が低い結果となった。目的に応じて収集したデータをグラフに表し、データの特徴を捉えることができるようにすることが大切である。例として、一目盛りの大きさを正しく捉え、目盛りを数えたり読んだりする活動を取り入れることが考えられる。

(3) 中学校第2学年

- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	数と式	図形	関数	データの活用
県との比較	○	○	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

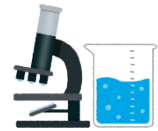
	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・「数と式」の領域における1次方程式を解く問題では、県平均正答率を大きく上回った。移項などの計算のきまりについての理解が定着してきていると考えられる。
- ・「関数」の領域の「与えられた内容が読み取れる正しいグラフを選ぶ」問題では、正答率が県平均正答率を下回り、理解に課題が見られた。伴って変わる二つの数量について、グラフを用いて捉え考察する場面では、その変化や対応の様子に着目して、その関数の特徴を調べるなどの活動を通して理解を深められるようにすることが大切である。
- ・「図形」の領域の「円柱と円錐の体積の関係」の問題では、理解とその活用に課題が見られた。図形について考える際、図形を構成する要素のうち、どれをどのように用いるかを確認したり説明したりする活動などを充実させることが考えられる。

3 理科

(1) 小学校第4学年



- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	「エネルギー」を 柱とする領域	「粒子」を 柱とする領域	「生命」を 柱とする領域	「地球」を 柱とする領域
県との比較	○	○	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・「エネルギー」領域の「音と振動に関する問題」について、トライアングルの振動を止めると音が止まるなど、音と振動を関連付けて理解することができており、正答率が県平均と比べて特に高い傾向が見られた。
- ・「方位磁針の使い方」について、北の文字を赤い針に重なるように合わせて観察することへの理解に課題が見られた。普段の授業の中で、方位磁針を使用する機会を増やすことで、正しい使い方を実感を伴って理解させることが必要である。
- ・「虫眼鏡の使い方」については、虫眼鏡を顔の近くで固定して対象物を動かすことについて昨年度に引き続き、理解できていない児童が多く見られた。動植物を観察する単元では、使用する機会を増やし、操作方法を身に付けることが重要である。

(2) 小学校第5学年

- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	「エネルギー」を 柱とする領域	「粒子」を 柱とする領域	「生命」を 柱とする領域	「地球」を 柱とする領域
県との比較	◎	◎	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	◎

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	◎

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。特に「エネルギー」・「粒子」領域で県の平均正答率を大きく上回った。
- ・「エネルギー」領域の「電気回路に関する問題」では、回路を流れる電流の大きさや向きについて、県の平均正答率を大きく上回った。今後も授業において、実験で得られた結果と知識を結び付けて理解させることが重要である。
- ・「生命」領域の「季節と植物の様子」に関する問題では、季節と植物の様子を結び付けて考えることにおいて課題が見られた。動植物の活動や成長の様子を気温と関連付けて考えさせることが大切である。
- ・温度計を使った気温の測り方について、風通しのよいところで1.2～1.5mの高さで気温を測ることが理解できていない児童が多く見られた。温度計を使って気温を測る際の知識を教えるだけでなく、なぜそのような条件で気温を測らなければならないのかを考えさせるなど深く理解させることが重要である。

(3) 中学校第2学年

- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	エネルギー	粒子	生命	地球
県との比較	○	－	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・「エネルギー」領域の「音による現象に関する問題」では、音の速さを使って音源までの距離を計算によって求めることや、実験結果から正しい考察をすることにおいて、正答率が県平均と比べて特に高い傾向が見られた。
- ・「粒子」領域の「気体の性質を調べる問題」では、気体の性質に関する個別の知識と、その気体の発生方法についての理解に課題が見られた。授業において、発生する気体を予想し、気体の収集方法を考え、実験を通して、気体の性質に関する理解を深めることが大切である。
- ・「地球」領域の「火成岩のつくりとでき方に関する問題」では、火成岩の特徴とマグマの冷え方とを関連付けて考えることに課題が見られた。火成岩の粒の大きさの違いに着目させ、この大きさの粒はマグマがどのように冷やされるとできるのか考えさせるなど、知識を教えるだけでなく、理由と併せて考えさせることが重要である。

4 社会

○中学校第2学年



- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
 ○ 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
 — 同程度（±1ポイント未満）
 ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
 ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	地理	歴史
県との比較	○	○

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	○

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別全ての正答率において、県平均正答率を上回る結果となった。
- ・地理的分野では、世界各地で見られる気候区分の特色に関する問題に課題が見られた。地名やその地理的な特徴を学習する際、位置や空間的な広がりから捉えたり人間の営みと関係付けたりするなど、複数の視点から多面的・多角的に考察する場を設けるなどの工夫が求められる。
- ・歴史的分野では、武家政治の成立の背景や推移における理解に課題が見られた。歴史的事象について、用語やその要因の理解にとどまらず、多面的・多角的に捉えられるようにすることが重要である。前後の因果関係を図示して整理したり、後世への影響を考えたりする場を設けるなど、単元の指導計画を工夫することが必要である。また、複数の資料を基に考えて記述する問題に課題が見られた。日頃より、資料から読み取れることについて意見を交換したり、資料同士の関連を説明したりするなど、考えたことを表出し合う学習を取り入れていくことが大切である。

5 英語

○中学校第2学年



- ◎ 大きく上回っている（5ポイント以上）
- 上回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- － 同程度（±1ポイント未満）
- ▽ 下回っている（1ポイント以上 5ポイント未満）
- ▼ 大きく下回っている（5ポイント以上）

① 教科の正答率

	全 体
県との比較	○

② 学習指導要領の領域別正答率

	聞くこと	読むこと	書くこと
県との比較	○	○	－

③ 観点別正答率

	知識・技能	思考・判断・表現
県との比較	○	○

④ 問題形式別正答率

	選択式	短答式	記述式
県との比較	○	○	－

⑤ 考察

- ・教科全体、各種別の正答率において、県平均正答率と同程度または上回る結果となった。
- ・情報や英文の概要を正確に聞き取る問題、語形や語法を理解しているかを確認する問題、英文から必要な情報を読み取る問題については、正答率が県平均と比べて高い傾向が見られた。
- ・話の概要を聞き取り、尋ねられたことに対して自分の考えを簡潔に答える問題については、正答率が低い傾向が見られた。また、対話の流れに合った英文を書く問題、読み取った内容を踏まえてまとまりのある文章を書く問題については、無解答率が高く、語や文法事項の誤りも見られた。授業において、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などの設定を工夫し、どのような応答がふさわしいのかを場面や状況、聞き手に応じて考えさせることが大切である。また、聞いたり読んだりした内容を踏まえて、自分の考えや意見を表現させる活動においては、表現した英語を生徒同士で修正する場面を意図的に設けるなど、表現の正確さを高める指導を工夫することが考えられる。

児童生徒質問調査の結果について

1 概要

質問別肯定率が算出できる項目における回答率の県平均との比較を行った（小学校調査 85 項目、中学校調査 104 項目）。

小学校第4学年では57 項目、第5学年では63 項目が同程度または上回る結果となった。中学校第2学年においては、72 項目が同程度または上回る結果となった。

2 各学年の結果

（1）小学校第4学年

【特に良好な結果となった項目】

授業であつかうノートには、学習の目標（めあて・ねらい）とまとめを書いている。

できるだけ自分一人の力で課題を解決しようとしている。

次の教科の授業の内容はよく分かりますか。 算数

勉強していて、「不思議だな」「なぜだろう」と感じることもある。

新聞を読んでいる。

【課題が見られた項目】

家で、学校の授業の復習をしている。

自然やうちゅうなど、科学の内容をあつかっているテレビを見たり本を読んだりするのは好きだ。

早ね、早起きを心がけている。

（2）小学校第5学年

【特に良好な結果となった項目】

分からない国名や地名があったら、インターネットや地図帳などを使って調べている。

新聞を読んでいる。

漢字の読み方や言葉の意味が分からないときは、辞書を使って調べている。

授業の最後に、学習したことをふり返る活動をよく行っている。

歴史上の人物やできごとをあつかっているテレビを見たり本を読んだりするのは好きだ。

【課題が見られた項目】

家で、学校の授業の予習をしている。

家の人としょう来のことについて話すことがある。

家で、学校の授業の復習をしている。

(3) 中学校第2学年

【特に良好な結果となった項目】

歴史上の人物やできごとを扱っているテレビを見たり本を読んだりするのは好きだ。
次の教科などの学習は好きですか。 社会
クラスは発言しやすい雰囲気である。
次の教科などの学習は好きですか。 音楽
分からない国名や地名があったら、インターネットや地図帳などを使って調べている。

【課題が見られた項目】

家で、自分で計画を立てて勉強をしている。
家で、学校や塾の決められた宿題のほかに自分で考えた勉強をしている。
次の教科などの学習は好きですか。 技術・家庭

(4) 考察

- ・授業に関する内容では、目標（めあて・ねらい）を示すことや、授業のまとめや振り返りを行うことに関する項目で、県平均回答率を上回る傾向が見られた。また、学年が上がるにつれて、インターネットや辞書などを用いた調べ学習やグループでの話し合い活動に進んで取り組んでいる傾向が見られた。今後は、児童生徒の主体的な学習をより一層促すため、目標の示し方や振り返りのさせ方、課題解決的な学習の在り方について、各校の分析結果を基に工夫改善を図りたい。
- ・小学校調査、中学校調査共に家庭学習に関する内容について、県平均回答率を下回る項目が見られた。各中学校区では、家庭学習への取組を意識付けする期間を設けたり、保護者への啓発を行ったりするなど工夫をしていただいている。さらには、児童生徒がより必要性を実感できる家庭学習の在り方が求められる。そのためには、タブレット端末の学習履歴を活用したり、授業とのつながりを意識できるような課題や魅力ある課題を取り入れたりするなどの工夫が考えられる。また、児童生徒自身が計画を立て、内容を考え取り組めるような働き掛けも大切である。今後も、実態を踏まえた家庭学習の工夫改善に努めたい。

今後、分析結果を学習指導や生活指導の工夫改善等に生かし、児童生徒の更なる学力向上につなげていきます。